

専門職であるカウンセラーとしての アイデンティティの構築

— カウンセリングの歴史と定義の変遷 —

Identity formation as a professional Counselor : History and definition of counseling

田 所 撰 寿

要約

本論文の目的は「カウンセラー」という専門職のアイデンティティについて、歴史や定義を振り返ることによって再検討し、明確に構築することを試みたものである。本論文では、日米におけるカウンセリングの歴史の変遷を概観し、それぞれの団体や論文が提示するカウンセリングの定義についてまとめた。その上で、日本におけるカウンセリング実践者およびカウンセラー教育者として、最重要であると考える6つの課題をまとめた。①カウンセラーのアイデンティティを明確に確立し、カウンセリングの定義を社会に示し、理解を広める努力をしなければならない。②カウンセリングのそれぞれの専門分野を尊重し、カウンセラーとして統一見解に至った発言をしなければならない。③カウンセラー教育プログラムは、実証的データに基づく専門知識と専門技術を提供しなければならない。④カウンセリング専門団体は、最前線の実践家を団体の意思決定に組み入れ、研究と実践が乖離しないように努力しなければならない。⑤カウンセラーは、研究者-実践家モデルに忠実であり、個々人の状況に応じた形で研究に関わるように努めなければならない。⑥カウンセラーは、エビデンスに基づき倫理的な実践を行わなければならない。

キーワード：カウンセラー, カウンセリング, アイデンティティの構築, 定義, 歴史

はじめに

初学者に対するカウンセラー教育において最も重要なことの一つは、日常生活における近親者や友人関係・知人関係において交わされている、「悩み相談」とカウ

ンセリングは大きく異なるということを明確にしていくことである。初学者に対してカウンセリングの説明をすると、必ずと言ってよいほど「自分がイメージしていたカウンセリングとは異なる」、「自分が憧れ

ていたカウンセラーの仕事と何か違う」といった反応が返ってくる。カウンセリングのイメージを調査した研究でも、実際にカウンセリングを経験した者と経験していない者とのイメージの違いが見出され(生駒, 2014)、また、カウンセリングを学ぶことによってそのイメージがさまざまに変容していくことが明らかになっている(前堂, 2005)。

こうしたイメージと実態のズレ(時に誤解)を修正し、カウンセラーとしてのアイデンティティを構築するように導くことがカウンセラー教育には求められている。このズレを解消する方法の一つが、「専門的な援助活動を行う職業としてのカウンセラーを理解すること」である。このフレーズの中で重要な単語は、①「専門的」(専門性)と、②「職業」である。広辞苑によると「専門的」とは、「ある特定の分野だけに深くかかわりがあるさま」となっている(広辞苑, 2008)。さらに「職業」とは、「日常従事する業務。生計を立てるための仕事。生業」となっている(広辞苑, 2008)。すなわち、「カウンセリングの分野に深くかかわり、カウンセリングを行うことによって生計を立てている」者が、カウンセラーといえることができる。冒頭の日常生活における「悩み相談」とは、明らかに異なることがわかる。すなわち専門職であるカウンセラーがカウンセリングを行うことは、人徳のある人、人生経験が豊富な人が、悩める子どもや若人、さらには救いを求めてくる者に対して、その人生の道を指し示すといっ

たことではない。端的に言うならば、「職業として、専門的知識と技術を持ったものがそれらを用いて、代価を得ながら心理的援助活動を行うこと」である。

一方で、専門職として「カウンセラー」を位置づけるためには、「どのようなカウンセラーを育成したいのか」という教育者側の考えが重要である。これにはカウンセラーとして求められる、役割、資質、責任等のアイデンティティを明確に示すことが必要となる。そのためにはカウンセラーとしてのポリシーや人間観、哲学を理解し意識しておくことが必要不可欠であろう(田所, 2017a)。一方で、カウンセラーのアイデンティティを明確にする上でとても役立つことは、そのルーツを辿ることである。カウンセラーやカウンセリングはどこから生まれ、どのような変遷を経て今に至るのか。そしてこれから先、どこへと向かおうとしているのか。これらの問いに対する答えを探していくことが有効であろう。

カウンセリングの歴史

専門的職業としてのカウンセラーの変遷を概観することは、カウンセリングの役割や専門性を認識することに役立つ、ひいてはそのアイデンティティを理解することに有益である。そこで、カウンセリング心理学の歴史の変遷について、1992年に初版が出版され、現在第3版が出版されている“*Counseling Psychology*”(Gelso, Williams & Fretz, 2014)により紐解いていきたい(Table 1)。

(1) 1940年代～1950年代

社会的に認められる職業としては明確な基準と組織が求められるが、1940年代にカウンセリング心理学は自律的な組織としての一步を踏み出すこととなる。この時期は第二次世界大戦真ただ中であり、心理学者として訓練されたほとんどの人が軍隊に関連する領域で、アセスメント(心理測定)に関する仕事に従事していた。こうした経緯があり戦後、臨床心理学、産業心理学、教育心理学、学校心理学など時を同じくして、アメリカ心理学会第17部会として「カウンセリングとガイダンス部会」が設立され、1951年に「カウンセリング心理学部会」(Division of Counseling Psychology)と名称を変更する。1940年

代、臨床心理学者は主に精神病院におけるアセスメントと診断に力を注いでおり、1950年代までカウンセリングや心理療法は全く注目されていなかった。この時期、一方で産業における心理学が発展してきており、カウンセリング心理学者は臨床心理学と産業心理学の間の空白、すなわち一般の人のパーソナリティ機能や発達に焦点を当てた研究や臨床を行うこととなる。この時期のカウンセリング心理学者の大半が、自らをカウンセリングの組織と臨床心理学の組織の両方の一員であると認識していた。この二重のアイデンティティの問題は時に矛盾するときもあったが、臨床家としての視点を広く持ち続けることは専門職業の活力の源でもあった。

Table 1 カウンセリング心理学の歴史における重要な出来事

年	出来事
1946年	アメリカ心理学会の第17部会として「カウンセリングとガイダンス部会」が設立される
1949年	Boulder会議において科学者-実践家モデルが提唱される
1951年	第17部会の名称を「カウンセリング心理学部会」(Division of Counseling Psychology)へと変更する。 第1回学術会議がノースウェスタン大学(シカゴ)で開かれ、科学者-実践家モデルが採択される
1954年	学術誌“The Counseling Psychology”が創刊
1964年	学術誌“Counseling Psychologist”が創刊 第2回学術会議がグレイストン(ニューヨーク州)で開かれる
1973年	ヴェイルカンファレンス：心理学における訓練についてのカンファレンスが行われた
1974年	「健康サービスの提供に関する全国登録機関」(National Register of Health Service Provider)が設立される
1975年	「カウンセリング心理学トレーニングプログラム評議会」(Council of Counseling Psychology Training Programs)が設立される
1987年	第3回学術会議がアトランタ(ジョージア州)で開かれる
1988年	「アメリカ心理学協会」(American Psychological Society)が設立される(2006年からは「心理科学学会」[Association for Psychological Science]となる)
1999年	アメリカ心理学会の心理学に関する職業専門領域と技能認定委員会より、カウンセリング心理学が専門領域として認められる
2001年	第4回学術会議がヒューストン(テキサス州)で開かれる
2003年	第17部会の名称を「カウンセリング心理学会」(Society of Counseling Psychology)と変更する
2008年	第5回学術会議がシカゴ(イリノイ州)で開かれる(テーマ「未来の構築：変容する世界におけるカウンセリング心理学者」)

(Gelso, Williams & Fretz, 2014)

第二次大戦後、社会は科学技術の発展により大きく変化しようとしていた。カウンセリング心理学者はこのような環境の変化に対するソーシャルサポートを行い、同時に仕事を始める際に必要とされる専門的支援を提供していた。数百万人におよぶ復員兵は職業訓練を受けられておらず、しかしながら新しい仕事を求めている。この時期のカウンセリング心理学者は、「起きたことに対処する」（ある意味相談室でクライアントを待っている）職業であった。

1950年代に入ると、カウンセリング心理学者は自らの能力と役割を主張し始め、独立した領域として認められるようになる。この時期は、職業としての体系的な知識や基盤が作られはじめた時期である。1951年ノースウェスタン大学で開かれた第1回学術会議において、専門職としてのカウンセリング心理学について話し合いがもたれた。ここではカウンセリング心理学者の役割と機能の定義について検討され、実習訓練、研究訓練、そして心理学において基準となる教育内容が提案された。

ノースウェスタン学術会議で検討されたカリキュラムは、その後復員軍人援護局において活用されることとなった。当時精神科領域では臨床心理学者が実践を行っていたが、カウンセリング心理学者は一般医療の領域におけるカウンセリングサービスを提供することを目的として、復員軍人援護局で活躍することとなる。このような歴史的な背景があり、現在でも復員軍人援護局で仕事に従事するカウンセリング心理学者は多い。またこれら

の流れから、心理学における専門資格を創設するという流れにつながっていく。

一方で、研究領域における新しい動きとして、4人の若いカウンセリング心理学者 (Hahn, M.E., Seashore, H.G., Super, D.E., & Wrenn, C.G) によって、最も代表的かつ実証的な研究雑誌 “*Counseling Psychology*” が1954年に創刊されることとなった。

(2) 1960年代～1970年代

1960年代から1970年代初頭にかけて、カウンセリング心理学者は専門職としてのアイデンティティの問題に苦悶する時期であった。ある論文ではカウンセリング心理学は“衰退”しているとされ、別な論文では“今や成長していく領域ではない”と切り捨てられた。すなわちこの時期はカウンセリング心理学としての成長力が低下するばかりでなく、方向性も見失っていたのである。

第2回学術会議(1964年のクレイストン会議)では、ノースウェスタン会議において議論された定義や基準について、再検討することが求められた。この会議では、改めてカウンセリングの対象とするのはある特定の人ということではなく、教育的職業的視点を基盤として、正常な発達をしている個人や家族や環境における、身体的、情緒的、精神的障害の心理を対象とするとの認識に至った。

この時期は理論的にも実証的にもカウンセラーのキャリア領域の研究が大きく成長した時期でもあった。そして “*The*

Counseling Psychologist” という実証的な研究雑誌が1964年に刊行されることとなる。この研究雑誌では、一つのトピックスに対して多くの立場(来談者中心療法、行動療法、職業カウンセリング等)からの論文を求め、活発な議論が行われた。

1970年代に入っても、カウンセリング心理学者としてのアイデンティティは依然として明確なものではなかったが、如何にカウンセリング心理学が存在すべきかどうかではなく、如何に関連分野においてカウンセリング心理学の独自性を定義できるのかという考え方に移行していった。また、この時期は専門職としてのトレーニングプログラムが作成されるようになる。そこで専門資格として認められるトレーニング内容とはどうあるべきか、検討が行われるようになった。1973年のヴァイル会議ではトレーニング内容についての検討が行われ、他の会議でも同様の内容が検討された結果、1975年に「カウンセリング心理学トレーニングプログラム評議会」(Council of Counseling Psychology Training Programs)が設立された。

(3) 1980年～1990年代

1987年に開かれたジョージア会議には、180名以上の心理学者が参加し、5つの検討委員会に分かれて各グループのテーマについて議論が重ねられた。5つのテーマとは次の通りであった。①トレーニングと資格認定、②研究、③組織および運営体制、④社会的イメージ、⑤多様な場面における専門的実践。

1980年代の終わりから、ジェンダー、人種、年齢、性的指向(LGBTQ)、ライフスタイルといった多様性が重要視されてきた。そして、カウンセリング心理学者は多様な場面での多様な役割が求められるようになった。このようにしてカウンセリング心理学者のアイデンティティはより拡大したものとなっていった。このような中でこうした流れに反発するものが、「アメリカ心理学会」(American Psychological Society)を1988年に設立した(これは2006年に「心理科学学会」[Association for Psychological Science]と名称を変更している)。

こうした流れの中でアメリカ心理学会におけるカウンセリング心理学部会は、1992年にFretz会長により再編成されることとなる。その結果として、6つの最重要課題が挙げられた。すなわち、①健康的な心を対象としたカウンセリング、②民族と人種の多様性、③カウンセリング心理学として独自性のある実践、④セクシャルマイノリティへの気づき、⑤職業心理学協会、⑥女性部門、である。

(4) 21世紀におけるカウンセリング心理学

2003年にカウンセリング心理学部会は名称を、「カウンセリング心理学会」(Society of Counseling Psychology)へと変更する。2000年に部会長となったCarter会長は、初めての大学に属さないフルタイムの実践家であった。このように実践により力を入れた流れが生まれ、その中でも多様性や社会正義により強調点が置

かれるようになった。またグローバルゼーション（国際化）の流れがあり、アメリカ以外のカウンセリング心理学者との統合が起こってきている時期である。

最終的に多くの関心が、未来のカウンセリング心理学者が成長していくことと、未来のリーダーをサポートしていこうという動きに置かれている。

(5) アメリカカウンセリング学会の活動

他方で、カウンセラーの専門団体として現在大きく発展してきているのが「アメリカカウンセリング学会」(American Counseling Association : ACA) である。ACAは1952年にAmerican Personnel and Guidance Association(APGA)として発足し、1983年にAmerican Association of Counseling and Development(AACD)へと名称を変更し、1992年に現在の「アメリカカウンセリング学会」となったカウンセラー専門職のための学会である。会員数は2017年現在で55,000人以上とされ、この分野における世界最大の学会である。また次の20の部会から成り立っており、カウンセリングとその関連分野における活発な活動が行われている。部会は、①成人の発達と加齢部会、②測定・評価部会、③子どもと青年部会、④カウンセリングの創造性部会、⑤大学カウンセリング部会、⑥カウンセラー教育とスーパービジョン部会、⑦ヒューマニスティックカウンセリング部会、⑧性的マイノリティ(LGBT)部会、⑨多文化カウンセリングと開発部会、⑩メンタルヘルスカウンセラー部会、⑪リハビリ

テーションカウンセリング部会、⑫スクールカウンセラー部会、⑬スピリチュアル・倫理観・宗教観部会、⑭グループワーク専門家部会、⑮カウンセラーの社会的正義部会、⑯国際アディクションと犯罪者部会、⑰国際結婚と家族カウンセラー部会、⑱軍隊と政府のカウンセリング部会、⑲国際キャリア開発部会、⑳全国雇用カウンセリング部会、である。

ACAの活動は心理学という特色よりも、その起源であった職業やガイダンスといった特徴が色濃く残っている。したがって心理学の団体というよりも、社会に根差した様々な学問、社会情勢、ポリシーを包含した学会であると考えられる。こうした影響力の拡大が、カウンセリングの定義、倫理綱領などカウンセリングの世界的な動きをACAが牽引していることでも見て取ることができる。

日本におけるカウンセリングの歴史の変遷

(1) カウンセリングの導入

日本国内で初めて「カウンセリング」(1952年)というタイトルの著書を出版したのが、アメリカのミズリー大学大学院に留学しカウンセリングを学んできた伊東博だとされている(國分, 2008; 杉谷, 1989)。伊東博と東京教育大学の教育相談所に勤務していた友田不二男を中心として、日本のカウンセリング界は展開していくこととなる(杉谷, 1989)。

伊東(1966)は、日本におけるカウンセリングの導入が戦後、学校現場に導入され

たことを紹介している。しかしながら当時の日本には、カウンセラー養成計画も研修の機会も無かったため、周囲の無理解の中、創世記のカウンセラーは苦しい産みの苦しみを経験したとしている。このような状況の中、友田不二男により1951年Rogers, C. R.の“*Counseling and Psychotherapy*”が「臨床心理学」という書名で翻訳、公刊された。

一方、大学におけるメンタルヘルスの見地から東京大学、京都大学、横浜国立大学等に学生相談室が開設されるようになる。

このような時期に、1955年8月には、茨城キリスト教大学において友田不二男を中心に、第1回カウンセリング研究討論会が開かれ、その参加者を中心にその年の11月に「東京カウンセリング・センター」が開設されることとなる。この後、友田不二男訳による「ロジャース選書」が次々に発刊されることにより、日本全国にロジャースの理論が広がっていった(杉谷, 1989)。また、日本応用心理学会に1960年「相談部会」(日本相談学会、後の日本カウンセリング学会)が設立される。この部会はやがて親学会である日本応用心理学会よりも規模的に大きくなってしまったために、1967年に独立して日本相談学会となる(田中, 1997)。

(2) 学校カウンセリングの発達

教育界におけるカウンセリングは先駆的な実践が行われており、徐々に全国に広がっていった。「昭和38年(1963年)ころの私の推定では、全国の小、中、高校で、何らかの形で相談室を設け、カウンセラーを任命していた学校の数は250校を超えて

いた。」と伊東は記している(伊東, 1966, p204)。この時期学校社会において問題となっていたのは非行の問題であり、カウンセリングは非行対策として取り上げられていたようである。これから考えられることとしては、カウンセリングは非行少年の治療や、問題児や不適応者を学校生活に適応させようという矯正の役割が大きかったようである。

相談室の普及率が最も高かったのは大学であり、1958年には約20%の大学が学生相談室を持っていた(伊東, 1966)。この時期の相談室の利用状況を見てみると、全生徒の10~17%の生徒が利用していたという結果が出ており(伊東, 1966)、これは驚くべき数字である。さらに学生や生徒に対して「あなたは相談を受けようと思って果たさなかったことがありますか」というアンケートに対して、ある大学では69%、ある高校では30%~32%が「ある」と回答していたことを報告している(伊東, 1966)。

(3) 産業カウンセリングの発達

産業界における日本の企業内での相談活動の萌芽は、大正期に求められる(丸山, 2008)。さらに戦後カウンセリング導入の動きがあり、1955年前後から多くの企業が人事相談部制度を採用し始めている(伊東, 1966)。そして1960年には、全国規模で研究討論の場となった「産業カウンセリング第1回全国研究集会」が開催された(丸山, 2008)。こうした中から産業カウンセラーといった資格が生まれてくる。

産業界におけるもう一つの流れは、グ

ループ・カウンセリングおよび創造性開発である(伊東, 1966)。カウンセリングが不適応者や精神的疾患に対応することを中心的な役割とするのではなく、もっと積極的に人間性の回復、人間の可能性の実現を目指すものであるとする立場である。この流れが人間性開発のための宿泊研修へとつながり、当時の企業研修における自己啓発セミナーとして大ブームを引き起こす一因となったと推測される。

(4) 一般の人を対象としたカウンセリングの展開

学校や企業におけるカウンセリングの他では、公立の相談機関として教育相談室や児童相談所においてカウンセリングが行われていた。その他に現在の精神保健福祉センター、警察の青少年相談、家庭裁判所における少年相談や法律相談などが行われていた。

一方で、私立の相談機関は極めて少なかった。最も古い歴史を持つのが、愛育研究所と田中教育研究所とされている(伊東, 1966)。

(5) 欧米と日本のカウンセリングの相違点

アメリカからカウンセリングを輸入したことに関する影響として深山(1990)は、日本的立場は自己否定型(I'm not OK. You're OK)であると、なんでも無批判的に外来思想を受け入れる危険性が大きいと指摘している。そして欧米と日本を文化的・社会的背景の違いについて次の9点を挙げている(深山, 1990)。この中から重要

だと考えられる5点を取り上げてみたい。

①個人主義-集団主義

欧米はカウンセリングの前提として、自分の問題を自分自身で解決することを前提とする個人主義である。これに対して古来より日本の伝統は、他人とのかかわりの中で集団として決定するという集団主義である。カウンセラーにとって必要なことは個人的な心情と思考の強さであり、この点を踏まえてカウンセリングに臨む必要がある。

②権威主義(依存性)

日本文化の特徴とし、一部のエリートのみが自分の志向に自信を持ち、大多数の一般人は自信を失って、権威に対して依存的になるか、あるいは頑な自己流の独断と偏見に閉じこもる傾向がある。したがってクライアントが困難にぶつかった時にカウンセラーに対して、恰も弱者が強者に向かうような依存感情を抱きやすいことが示唆される。

③情緒主義

日本人は文化的に感情の表出を禁止されてきた。しかし決して論理的な国民というわけではなく、極めて情緒的な国民である。それ故日本人の情緒は内面化されていて、直接的、外面的な表現を伴わないものである。

④家族主義

身内の恥は世間には知らせないという気持ちから、カウンセリングを避けることがある。または離れたコミュニティにまで出かけ、カウンセリングを受けるという行動をとることがある。

⑤長老主義

年齢や経験年数が過度に重視される。カウンセリング関係がカウンセリングという仕事の関係と理解されるのではなく、上下意識を伴う人格的關係として捉えられてしまう。したがって社会的に従属者の立場にある人達が主なクライアントで、人の上に立つ人々はカウンセリングを求めない。

以上に述べてきた日本文化特有の文化的・社会的背景を理解したうえで、日本独自のカウンセリングを発展させていくことが求められていた。日本にカウンセリングが導入された当初は、ガイダンスや能力開発といったニュアンスが強く、現代の辞書の定義による「精神医学的・臨床心理学的問題解決」という意味合いはあまりなかったように感じられる。日本においてもカウンセリングが大きく発展してきたのは第二次世界大戦後である。この時の社会情勢、さらにはこの後に展開される学会間における議論の結果として現在の認識に至っていると考えられる。今後においても公認心理師という国家資格の流れから、カウンセラーやカウンセリングに対する認識は大きく変容していくことが予想される。したがって日本におけるカウンセラーのアイデンティティは、今後ますます混迷の状況を経験することになるだろう。重要になるのは、冒頭に述べた「どのようなカウンセラーを育成したいのか」というカウンセラー教育者側の考えである。しかしながら日本のカウンセリング界においては「カウンセラー教育」という分野

が存在しないばかりか認識さえも希薄なようである(田所他, 2017)。ACAでは第6部会として「カウンセラー教育とスーパービジョン部会 (Association for Counselor Education and Supervision : ACES)」があり、大学院生や現任者へのカウンセラー教育において重要な役割を果たしている。カウンセラー教育は、エビデンスのある教育内容を反映させていかななければならない。しかしながら日本ではカウンセラー教育における実証的な研究がほとんど行われておらず、結果的にそれぞれのカウンセラー教育者の経験と勘による教育が行われているのが現状である。これらは、近年最も重要視されている“Evidence Based Practices”の流れと矛盾する。したがって日本におけるカウンセラーのアイデンティティを確立するためにも、社会に認められる実践を行うためにも、カウンセラー教育という分野を確立し、実証的な研究と実践を行っていくことが求められている。

カウンセリングの定義

手元にある事典等で調べてみると、さまざまな定義がなされている。広辞苑では「個人の持つ悩みや問題を解決するため、助言を与えること。精神医学・臨床心理学等の立場から行うときは、心理カウンセリングと呼ぶことがある。身上相談。」(広辞苑, 2008)、明鏡国語辞典では「個人の悩みを聞き、問題解決のための支援や助言を与えること。特に、臨床心理学の立場からそれを行うこと」となっている(明鏡国語辞典, 2010)。

学術団体または論文・専門書におけるカウンセリングの定義をTable 2にまとめた。日本人による定義としては河合(1970)を、欧米の定義としてハーとクレイマー(渡辺, 2002)の定義を挙げた。日本におけるカウンセリング創世記の定義としても、人間の成長や可能性、個人の意思決定能力を重要視していることがわかる。

日本カウンセリング学会では、日本におけるカウンセリングの独自性を強調するために定義委員会を2002年に発足させた。さまざまな検討を重ねた結果、2004年に日本カウンセリング学会としての定義を、その年の年次大会総会における理事長講演において報告した(田上・小澤, 2005)。

日本カウンセリング学会がカウンセリングの定義を策定した際には、5つの解説が付されている(田上・小澤, 2005)。その中で「カウンセリングの基盤となる理論は、人間発達とその促進に関する科学である。特に、主体的生き方に焦点化した生涯発達理論やキャリア発達理論などの人間成長理論が重要となる。」「カウンセリングは、クライアントがカウンセラーから人間として十分に尊重される人間関係を基盤として行われる。」との考え方には筆者としても同様な考え方であり、カウンセリングの定義のみならず、カウンセリング実践において最も重要な態度であると考えられる。

アメリカにおいても様々な心理療法が開発される中で、対人援助の方法として各心理療法を統合する流れが大きくなり、アメリカカウンセリング学会(American Counseling Association; ACA)が中心と

なってACAの各部会が共通した定義を定めようとの動きが始まる。ACAは2005年に“20/20: A Vision for the Future of Counseling”委員会を設置し、カウンセリングの未来を考え、何を取り組むべきかについて検討を始める。この委員会にはACAの関連部会やその他の団体など31の団体の代表委員が参加し、カウンセリングの定義等のテーマを検討した。未来のカウンセリングを考えるにあたってこの委員会では、最終的にまとめられた提案書に対して全体の9割の団体が承認することを目指した。そして、31部会の参加団体のうち29団体が最終的な提案に署名する結果となった(Kaplan, Tarvydas & Gladding, 2014)。

“20/20: A Vision for the Future of Counseling”委員会では、カウンセリングの定義についての検討が繰り返され、最終的に2010年3月に“Counseling is a professional relationship that empowers diverse individuals, families, and groups to accomplish mental health, wellness, education, and career goals.”「カウンセリングとは、メンタルヘルス、ウェルネス(心身ともに良好な状態)、教育、そしてキャリア(学業および職業)の目標を達成するために多種多様な個人、家族、グループをエンパワーする(力づける)専門的な関係」と定義した(括弧内は筆者による補足説明)(20/20: A Vision the Future of Counseling, 2010a)。そしてこの定義がカウンセラー教育における多くの教科書に採用されている(e.g., Council of Counseling Psychology Training Programs, 2010 ;

Sangganjanavanich & Reynolds, 2015)。

“20/20 : A Vision for the Future of Counseling” 委員会により定義された内容は、立場の異なるものたちが共通理解できる内容となっているため、非常に抽象的かつ端的に定義されているといえる。しかしながら、すべてのカウンセラーが共通理解できるカウンセリングの定義を定めておく

ことは、カウンセリングが現代社会において認められていくためには必要不可欠なものである。なぜならば、同じ専門家が、同じサービスと銘打っている内容が全く異なるとしたら、利用者は混乱するばかりか不信感を抱くであろう。共通な定義の上で、それと矛盾しない形で自らのカウンセリングの特徴を丁寧に説明していくことが求め

Table2 カウンセリングの定義

河合(1970)	カウンセリングの一番の狙いは、あくまでクライアントの心の底にある可能性に注目して、それによって本人が主体的な努力によって、自分の可能性を発展させていく、そのことによって問題も解決されていくという点にある。
ハーとクレイマー(渡辺, 2002)	カウンセリングとは、心理学的な専門的援助過程である。そして、それは、大部分が言語を通して行われる過程であり、その過程のなかで、カウンセリングの専門家であるカウンセラーと、何らかの問題を解決すべく援助を求めているクライアントがダイナミックに相互作用し、カウンセラーはさまざまな援助行動を通して、自分の行動責任をもつクライアントが自己理解を深め、「よい(積極的・建設的)」意思決定という形で行動がとれるようになるのを援助する。 そしてこの援助過程を通して、クライアントが自分のなりうる人間に向かって成長し、なりうる人になること、つまり、社会のなかでその人なりに最高に機能できる自発的で独立した人として自分の人生を歩むようになることを究極的目標とする。
日本カウンセリング学会(2004)	カウンセリングとは、カウンセリング心理学等の科学に基づき、クライアント(来談者)が尊重され、意思と感情が自由に豊かに交流する人間関係を基盤として、クライアントが人間的に成長し、自律した人間として充実した社会生活を営むのを援助するとともに、生涯において遭遇する心理的、発達の、健康的、職業的、対人的、対組織的、対社会的問題の予防又は解決を援助する。すなわちクライアントの個性や生き方を尊重し、クライアントが自己資源を活用して、自己理解、環境理解、意思決定および行動の自己コントロールなどの環境への適応と対処等の諸能力を向上させることを支援する専門的援助活動である。
カウンセリング大辞典(小林, 2004)	クライアントに対して、面接やグループ・ワークによる言語的または非言語的コミュニケーションを通して心理的相互作用(人間関係)によって、行動や考え方の変容を試みる援助の方法であり、クライアントの人格的統合の水準を高めるための心理療法。
20/20 : A Vision for the Future of Counseling(2010a)	カウンセリングとは、メンタルヘルス、ウェルネス、教育、そしてキャリアの目標を達成するために多種多様な個人、家族、グループをエンパワーする専門的な関係。
Hackney & Bernard(2017)	カウンセリングとは、クライアントの生活にうまく接したり理解すること、彼らの状況を改善するという目標を達成すること、そして目標達成のためにクライアントに援助介入することによって、クライアントを援助するために求められる専門的知識、人間関係スキル、人間的素質を統合したものである。

られていると考える。筆者は、ハーとクレイマーの定義が自らの考え方に近く、この定義を基に実践を行っているが、“20/20 : A Vision for the Future of Counseling” 委員会の定義とも矛盾しない。このように根本は同じであるという専門職としての姿勢を示していくことが、カウンセラーというアイデンティティを社会に認知させていくことにつながるのではないだろうか。これはこれからのカウンセラーにも大切なことであるが、その点について次の節において詳細に扱うこととする。

これからのカウンセラーにとって必要なこと

21世紀を迎えるにあたって、カウンセリング界では未来に向けて自らの役割と責任を見直し、広く検討を行い、未来への提言を行ってきている。アメリカにおけるこの動きに代表されるものが、2005年から2013年まで活動を行った先に取り上げた“20/20 : A Vision for the Future of Counseling” 委員会である。委員会はカウンセリングの定義を定めたほか、未来に向かうカウンセリングの重要な主題として7つの領域の検討事項を挙げた (20/20 : A Vision the Future of Counseling, 2010b)。すなわち、①カウンセラーにとっては、共通の職業的アイデンティティを共有することが重要である、②統一された職業として示すことは多様な利点がある、③カウンセリングの一般的な認識を向上させ専門的問題を擁護するために協働することは、専門的職業を強化する、④免許取

得のための柔軟なシステムの構築は、カウンセリングの職業を強化する、⑤研究基盤の拡大と促進は、専門的カウンセラーの効果と職業についての一般的な認識を広めるために必要不可欠である、⑥カウンセリングの職業の健全な発展を確固たるものにするためには、今いる学生そして未来の学生に焦点を当てる必要がある、⑦クライアントの福祉を促進し我々がかわる人々を擁護することは、カウンセリングの職業における主要な役割である。

さらにはこれらの重要な主題に対する目標達成の戦略としてTable 3に示す内容を提言した (20/20 : A Vision the Future of Counseling, 2010b)。

この内容は現在の日本においてもそのまま当てはまるものであり、我々はこれらの内容を一つひとつじっくりと吟味し、自らの役割責任を新たにしなければならないだろう。特に筆者が日本のカウンセラーのこれからにおいて重要だと考える6つの内容を取り上げてみる。①カウンセラーのアイデンティティを明確に確立し、カウンセリングの定義を社会に示し、理解を広める努力をしなければならない。②カウンセリングのそれぞれの専門分野を尊重し、カウンセラーとして統一見解に至った発言をしなければならない。③カウンセラー教育プログラムは、実証的データに基づく専門知識と専門技術を提供しなければならない。④カウンセリング専門団体は、最前線の実践家を団体の意思決定に組み入れ、研究と実践が乖離しないように努力しなければならない。⑤カウンセラーは、研究者－実践家

Table 3 未来のカウンセリングへの目標を達成するための戦略リスト

-
- ▶ カウンセリングの専門職は、社会に対してカウンセリングの定義を明確に示さなければならない。
 - ▶ カウンセリングの専門職は、カウンセリングの究極目標である最適の健康及びウェルネスを促進しなければならない。
 - ▶ カウンセリングの専門職は、すべてのカウンセラーが共有する中核となる知識とスキルを身につけなければならない。
 - ▶ カウンセリングの専門職は、国や国際水準において統一した発言を行わなければならない。
 - ▶ カウンセリングの専門職は、すべてのカウンセリングの専門分野に対して最大限の敬意を払わなければならない。
 - ▶ カウンセラー教育プログラムは、カウンセリングが特別な分野の訓練を受けた一専門職であるという哲学を反映しなければならない。
 - ▶ カウンセリング資格認定機関は、カウンセリングが特別な分野の訓練を受けた一専門職であるという哲学を反映しなければならない。
 - ▶ カウンセリングの専門職は、新しく生まれてきた知見と自然な形で進化した既存の知見が、発展的に適切なものとして融合するような流動的プロセスを開発しなければならない。
 - ▶ カウンセリングの専門職は、共有されたアイデンティティを反映したアウトリーチ／マーケティングプロセスを開発しなければならない。
 - ▶ カウンセリングの専門職は、専門的カウンセラーとは何か、所有する資格とスキル、どのような独自性があるのかについて、社会に明確な理解が得られるよう継続的なアウトリーチを行わなければならない。
 - ▶ 専門的カウンセリング組織は、すべての政策や意思決定において最前線の臨床家を参加させなければならない。
 - ▶ カウンセリングの専門職は、健康保険業界についての教育、カウンセリング、カウンセラーまたはクライアントに対する権利擁護について、統一した発言をしなければならない。
 - ▶ カウンセリングの専門職は、クライアントと生徒の権利擁護を促進するために、カウンセラーに対し継続的な教育と訓練を提供しなければならない。
 - ▶ 専門的カウンセリング組織は、毎年、その年に選ばれたコミュニティに対する権利擁護課題を達成できるよう協働しなければならない。
 - ▶ カウンセリングの専門職は、カウンセリングの未来に対して最も適切な組織構成を調査し説明しなければならない。
 - ▶ カウンセリングの専門職は、すべてのカウンセラー準備プログラムによって使用される共通準備基準と独自の訓練プログラムを構築しなければならない。
 - ▶ カウンセリングの専門職は、カウンセラーの開業認可について初心者レベルの肩書としての認可された専門資格(Licensed Professional Counselor : LPC)に対する画一的な資格基準を構築しなければならない。
 - ▶ カウンセリングの専門職は、実践家と学生による研究に興味を見出さなければならない。
 - ▶ カウンセリングの専門職は、研究の質的結果と量的結果の両方を重要視しなければならない。
 - ▶ 効果研究は、異なるカウンセリング状況における固有のクライアントにおいて最大の効果を発揮するカウンセリング手順を説明することに注目しなければならない。
 - ▶ 効果研究は、カウンセラーの準備における最も適切な実践を説明しなければならない。
 - ▶ カウンセリングの専門職は、カウンセラー訓練においても、様々な状況、様々なクライアントに対する専門的カウンセリングの介入においても、エビデンスに基づき、倫理的な実践を促進させなければならない。
 - ▶ カウンセリングの専門職は、カウンセリングについて大学院生を教育するために、大学生のためのプログラムと協働しなければならない。
 - ▶ カウンセリングの専門職は、大学院生や新しい専門家に対するメンターとしての役割を促進させなければならない。
 - ▶ カウンセリングの専門職は、実習やインターンシップのスーパーバイザーに対し報奨金、謝礼金、表彰を提供しなければならない。
 - ▶ カウンセラー教育プログラムは、学生に対し専門的カウンセリング協会の関与することを保証しなければならない。
-

(20/20 : A Vision the Future of Counseling, 2010b)

モデルに忠実であり、個々人の状況に応じた形で研究に関わるように努めなければならない。⑥カウンセラーは、エビデンスに基づき倫理的な実践を行わなければならない。日本におけるカウンセリング実践者およびカウンセラー教育者として、以上の6つが最重要課題であると考えられる。

おわりに

渡辺(2002)はカウンセラーの役割について、「変化を作り出す人、改革の発端を作る人」とし、個人が問題にぶつかりカウンセラーの援助が必要になるのを待つのではなく、率先して、個人を取り巻く環境の改善を促すような積極的な役割をとることによって個人を援助することが、現代社会におけるカウンセラーらしい働き方としている。さらに一歩進むならば「社会の改革者としてのカウンセラー」という役割が、我々には求められているのではなかろうか。

冒頭でカウンセラーとは、「端的に言うならば、職業として、専門的知識と技術を持ったものがそれらを用いて、代償を得ながら心理的援助活動を行うことである」と述べた。しかしすべての人がカウンセラーにはなることができるとも考えていない。そこには資質(disposition)、獲得すべき態度、さらにはカウンセラー教育におけるゲートキーピングの問題について更なる実証的研究が求められる(田所, 2017a; 2017b)。

もう1点、今回カウンセリングの歴史と定義の変遷を振り返ることによって、日本のカウンセラー教育における根本的な課題

に気づくことができた。それは厳格で明確な倫理綱領を定めることである。日本の各団体の倫理綱領はACAのそれと比較すると簡潔しすぎであり、特にカウンセラー教育における内容が欠けている。カウンセラーのアイデンティティを考える上で重要なのは、どのようなカウンセラー教育を行うのかという倫理である。今後はこの点についてもさらに議論を進め、倫理綱領において明文化していくことが求められている。

文献

- Council of Counseling Psychology Training Programs. (2010) Why become a professional counselor : What is Counseling? (<http://www.cacrep.org/for-students/why-become-a-professional-counselor/> 2017/10/29閲覧)
- 深山富男 (1990) カウンセリングとその心理、社会、文化、歴史的背景 愛知学院大学文学部紀要, **20**, 103-111.
- Gelso, C.J., Williams, E.N. & Fretz, B. (2014) *Counseling Psychology* : Third Edition. American Psychological Association.
- Hackney, H. L. & Bernard, J. M. (2017) *Professional Counseling : A Process Guide to Helping* (8th Edition). Pearson.
- 生駒忍 (2014) 本物のカウンセリングはもっと派手で気楽で献身的? : 福祉系大学生における「カウンセリング」のイメージ調査 日本教育心理学会総会発表論文集, **56**, 642.
- 伊東博 (1966) 新訂カウンセリング 誠信書房
- Kaplan, D. M. Tarvydas, V. M. & Gladding, S.T.(2014) 20/20 : A Vision the Future of Counseling : The New Consensus Definition of Counseling. *Journal of Counseling & Development*, **92**, 366-372.
- 河合隼雄 (1970) カウンセリングの実際問題 誠信書房
- 小林司(編) (2004) カウンセリング大事典 新曜社
- 國分康孝(監修) (2008) カウンセリング心理学事典 誠信書房

- 広辞苑 (2008) 広辞苑 第六版 岩波書店
- 前堂志乃 (2005) 大学生のカウンセリングに対するイメージの変化と心理学を学ぶ実感についての研究: 自主的体験学習プログラムとの関連を中心に 沖縄国際大学人間福祉研究, **3**(1), 1-35.
- 丸山和昭 (2008) 日本における「カウンセリング」専門職の発達過程: 産業カウンセラーを事例として 産業教育学研究 **38**(2), 1-8.
- 明鏡国語辞典 (2010) 明鏡国語辞典 第二版 大修館書店
- Sangganjanavanich, V. F. & Reynolds, C. A. (2015) *Introduction to Professional Counseling*. SAGE Inc.
- 杉谷昌代 (1989) 日本におけるカウンセリング運動: その歴史の変遷を探る 鈴鹿短期大学紀要, **9**, 73-82.
- 田上不二夫・小澤康司 (2005) カウンセリングとは何か—日本カウンセリング学会の定義を踏まえて— 下司昌一編集代表 カウンセリングの展望 プレイン出版 pp.3-15.
- 田所撰寿 (2017a) カウンセリングの質を高めるカウンセラー教育プログラム—“カウンセリングコンピテンス”の概念を考える— 作大論集, **7**, 67-82.
- 田所撰寿 (2017b) カウンセラー教育におけるゲートキーピングの意義 作新学院大学・作新学院大学女子短期大学部 教職実践センター研究紀要, **4**, 57-66.
- 田所撰寿・高木憲子・日野千宜・松本浩二 (2017) カウンセラー教育のこれまで、そしてこれから 日本カウンセリング学会第50回大会発表論文集, 56.
- 田中熊次郎 (1997) 日本カウンセリング学会の歴史(初期) カウンセリング研究, **30**, 307-314.
- 20/20: A Vision the Future of Counseling. (2010a) Counseling definition of counseling. (<https://www.counseling.org/knowledge-center/20-20-a-vision-for-the-future-of-counseling/consensus-definition-of-counseling> 2017/10/29 閲覧)
- 20/20: A Vision the Future of Counseling. (2010b) Passing the 20/20 Torch (<https://www.counseling.org/knowledge-center/20-20-a-vision-for-the-future-of-counseling/concepts-for-future-exploration> 2017/10/29 閲覧)
- 渡辺三枝子 (2002) 新版カウンセリング心理学 ナカニシヤ出版

謝辞

本研究はJSPS科研費: 16K04374の助成を受けました。